

ナナフシ

ナナフシというカマキリに似た昆虫がいました。

このナナフシ。昆虫図鑑で調べてみるといろいろ面白いことがわかります。

まずこの枯枝のような恰好をした虫をつかまえようとすると、この虫、自分でボタンと地べたに落ちて死んだふりをします。死んだふりをしたその姿をみるとちょうど枯枝が落ちているように見えます。

それからこの虫、つまんであおい葉っぱの上に置いてやると、その緑に同化してからだ全体緑の虫になってしまいます。他のものと一体になる、くっつく、一つに融け合うという方法でいのちを守り命を生きているのです。

ナナフシにかぎらず、いきもののかなには、このようにして自分のいのちを守っているものがたくさんいるのです。

それにはひきかえ人間は、これら生き物とは全く反対の方法でいのちを守り生きてきたのではないでしょうか。

他のものを厳しく排除しはねのけて生きています。免疫というはたらきを人間はからだのなかに蓄えています。どんなに親子の間でも、子供のからだは親の肝臓を拒否してしまうのです。

人と同化同調して生きる昆蟲とは反対に、自分と人の間に画然たる線を引き、区画を作り領分をはつきりさせて、ここは私の国、ここには他の民族は入ってはならぬ、という具合に対立したり差別したり、領土紛争、民族抗争をくりかえしてまいりました。

同じ家に住む人の間にも、主体性とか人権とか、自分と他人とを峻別して生きようとする構えができてしまっています。

そういう道筋を通ってきたことが人間の進歩だと考えられています。

人をはねのけて生きる、他を拒否して自分を生きる。排除し区画を作り、対立し差別しあって生きる生き方には、とうとう限界、どんづまりがきてしまいました。

互いに領分をつくり争いあつてゐる間に、地球はすっぽり二酸化炭素や塩素酸ガスに覆われ、人も虫も植物も生きられない地球になってしまっています。

「量を競いあい、数で対立しあう『有量の諸相』に生きる者たちよ。一「その有量のいのちを超えた無量なおきないのち無量寿に生きかえりなさい。同化攝取されなさい。帰命しなさい、よいかかりなさい。」とよんでもぐださる久遠の親の呼び声をきかねばならないときが、今きているのだということを知らされたことありました。



十一月二十日、京都のご本山「本願寺会館」において

兵庫教区出石組連研
研第七期の修了式が行われました。
勝林寺門徒で今回修了証書を授与されました。

たのは次ぎの六名でした。

武士心さん (坪口)

中嶋

古田

敬治さん (出石)

横山

良子さん (檀見)

菊美夫さん (保谷)

生田

初枝さん (檀見)

湯口